

進路指導における新聞活用について

宮崎県立日南高等学校
教諭 山田 聡子

1. はじめに

本校は、1・2年5クラス、3年6クラスから成る全校生徒約520名の普通科高校である。本来なら各学年5クラスであるのだが、今年度は生徒のコース選択の関係で3年生のみ6クラス編成となった。

昨年度から引き続いてNIEの担当になるにあたって、今年度も「進路指導における新聞活用」を主眼においた活動を考えた。

今年度の実施クラス（担当者の担任するクラス）は、3年総合文系クラス（男子9名、女子14名、計23名）である。生徒の大半は短大、専門学校への進学、もしくは就職を希望している。文章を読んだり書いたりすることに苦手意識をもっている生徒が多く、教科書以外の本はほとんど読まないという生徒も少なくない。年度初めのアンケートでは、7割以上の生徒が「新聞はほとんど読まない」と回答している。

2. 実践

①昨年度から引き続いての取り組み

週末課題として、コラム・投書など短めの事の感想や意見などを書かせた。分量として原稿用紙1枚程度とした。選択「国語表現」（週2単位、授業は別の者が担当している）を履修している生徒は授業で学習した論理的文章の書き方などをいかして書くよう指示をしたが、「論理的に表現すること」よりも「読んで自分の考えを持つこと」に主眼をおいた。

書かせた後は、誤字脱字や文章のおかしいところを添削した後、しっかりと自分の意見が述べられているものを配布し、自分が書いたものと比較させた。

私もSさんの考えに賛成です。

確かに日本は、どんどん進化して便利になり、何不自由なく生活できていて、一見豊かに感じますが、本当の豊かさとはまた違うように感じます。

情報社会が進んでいる今、携帯電話も1人1台持っている時代になり、インターネットでの書き込みで人を傷つけたりする問題も目立ってきました。私は、物の豊かさと心の豊かさは反比例だなあと感じました。

私は、本当の豊かさとはその人が心から幸せを感じているかどうかという所にあると思います。

これからの日本が、夢や希望で輝いている人たちでいっぱいになり、本当に意味で豊かな国になるといいなと思います。

（11/14 宮崎日日新聞 高校生の投書金で買えない本当の豊かさ）

私は文庫カバー自体使ったことがない。誰かが使っているのを見て私も欲しいなと思った時はあるのだが、どうやって手に入れたら良いかわからなくて、今でもいつか使いたいなと思っている。ニュースでもお洒落な文庫本カバーを紹介していて、本ももっと身近になりつつあると思っている。

そして「今、いろいろな本が横書きになっている」と書いてあったが、私も横書きに慣れているので横書きの方が読みやすい。この前、久しぶりにケータイ小説でない本を開いた時、無意識に後ろから開いて読もうとしていたことに気がつき驚いた。

私たちの世代はほとんどみんなが携帯や

パソコンに慣れている為、横書きに慣れている。このように日本古来の文化がどんどんなくなっていくのは寂しいし、悲しいと思う。

(10/27 宮崎日日新聞 くろしお 読書週間について)

最初のうちはあまり本や新聞を読まない生徒の1部は拒否反応を示したが、1カ月程経った頃には、ほとんどの生徒がきちんと取り組むようになった。

ケータイ小説に慣れ親しんでいる生徒は、縦書きの文章に違和感を感じ始めているというのが驚きだった。その意味では、新聞は生徒に縦書きの文章に親しませる媒体ともいえるのかもしれない。

②本年度の取り組み

本校では、今年度より進路実現のための課題研究として「実践進路研究学」(3年総合文系・週2単位)を設定した。生徒たちは、コースに分かれて担当職員の指導のもとで進路研究をすすめレポートを作成する。

今回担当した4名の2学期の取り組みとして新聞記事のスクラップをさせた。

生徒たちの具体的な研究テーマは「いじめや不登校について」「日本の古典芸能について」「日本の歴史遺産や伝統行事について」「話すこと(正しい日本語や読み聞かせなど)について」である。

(具体的な取り組み)

四種類の新聞(朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・宮崎日日新聞)に目を通し、自分のテーマに関する記事があれば切り抜く。その際、自分の進路に関係なくても友達の進路に関すると思われる記事があればチェックしたり、切り抜いて渡したりする。

切り抜いた記事は感想を書いてスクラップブ

ック(A4ファイル)に保管する。

最終的には記事を分類し、まとめのレポートと共に提出する。

(生徒の反応)

1学期はインターネットによる調べ学習をしていたため、新聞記事のスクラップを始めた時の反応はあまり良くなかった。

しかし、作業をすすめるにつれて「新聞は楽しい」という言葉が出てくるようになった。インターネットでの調べ学習の時は、情報量が多すぎるために調べれば調べるほど焦点が絞れなくなり收拾がつかなくなりがちであったが、新聞は整理がしやすく、目に見える形での達成感があったようだ。2時間連続の授業も、夢中になって取り組んでいるとあっという間に過ぎてしまうことも多かった。

また、インターネットは完全に各個人での作業になるが、新聞の場合は生徒ひとりひとりが違う視点で同じ紙面を扱うところに面白さがあった。自分が最初は見過ごした記事を友人から指摘されることによって問題意識が深まっていく場面もみられた。

(生徒のレポート)

学校教育に不満に思うこと改革が必要だと思ふことの調査を行つたところ「いじめ」が50%であることがわかつた。1番多かつたのは教師の質であつた。学校生活の中で今いじめが多いのはなぜか。どうして人をいじめたりするのかと思ふ。小学校や中学校だけでなく、幼稚園でもいじめが起つている。ある幼稚園では親が先生に「うちの子が〇〇君からたたかれ泣いて帰ってくるから様子を見てほしい。」と頼まれたのに何もせず放置していたため、いじめはエスカレートしていったという記事から「幼稚園の先生がいじめをとめなかつたら子どもは誰に助けを求めればいいのか、閉じこも

ってしまうのではないか」と思った。これからは、いじめをなくしていくことが課題になってくるので心理カウンセラーはもっと必要になってくると思う。

(12/26 読売新聞 「今の学校教育に満足しているか」)

(研究のまとめ)

いじめは小中学校だけでなく幼稚園でもあるのだと新聞を読んで初めて知りました。私は幼稚園はみんなで仲良く遊んだりする場所だと思っていたので、けんかはあってもしじめはないだろうと思っていました。

しかし、記事に書いてあったことはあまりにも信じられないことでした。幼稚園の先生はいじめを放置していたのです。(中略)これからは幼稚園や保育園の先生は子どもたちの様子をしっかりと見るべきだと思います。

いじめは、不登校とも関係してきます。私は「不登校」が多くなるのはいじめが関係しているのではないかと思います。新聞によると「学校教育に不満に思うこと改革が必要だと思うことのうち“いじめ”は50%」でした。

私はこれから「臨床心理士」を目指して大学で勉強しますが、これからの学校で「臨床心理士」はますます必要になるのではないかと思います。

この生徒は最初は「心理学」という漠然としたテーマで研究を進めようとしていたので、何に手をつけてよいのかわからなかった。しかし、少しでも「心理学」に関係ありそうな記事を探して「いじめ・不登校」「発達障害」「うつ症状とカウンセリング」などに関する記事をスクラップ、その中から特に「いじめ・不登校」に関心を持つようになり、将来は「スクールカウンセラーになりたい」という具体的な目標につな

がった。

指導する立場としても、新聞が生徒の進路実現につながっていることを実感することができた。

3. まとめ

今回の実践を通じて感じたのは、生徒たちは新聞を開こうとしないのではなく、新聞に触れる機会がないだけなのではないかということである。

最初に「新聞を使って授業をします」と連絡した時に「パソコンのほうがいい」と乗り気ではなかった生徒から、実践が終了する頃には「新聞って面白い」「新聞を見るのも趣味の一つです」という言葉が聞かれるようになった。また、休憩時間に旅行関係の広告記事などをチェックして将来行ってみたいところの話題で盛り上がるなど、新聞は「ニュースや知識を得るもの」からもっと身近なものになったようである。

しかし、生徒たちにとって引きつけられる記事は「写真が大きいもの」「鮮やかなカラー写真」が中心であり、どんなに見出しが印象的であっても写真がないと見過ごしてしまう場面も見られた。まだまだ「新聞を見る」段階にとどまってしまう生徒たちを、「新聞を読む」面白さに気づかせるところまで引き上げていきたい。

今回の実践は12月中旬に取材をうけ、1月に新聞紙上に掲載していただいた。自分の写真やコメントが新聞に載ることを最初は恥ずかしがっていたが、実際に掲載されてからはますます新聞を身近に感じたようである。そして、想像以上のたくさんの人たちから「新聞を見たよ」と声をかけられ、たくさんの人が新聞を読んでいることを改めて生徒とともに感じる事が出来たのも貴重な経験であった。

今回の実践はこれで終了するが、これからも様々な場面で新聞を活用していきたい。そして生徒たちにとってこれからますます新聞が身近なものであってほしいと考える。